

あを 2

2007



制作

併誌 salon

正平鐵筆



仙鶴湖
山田正平

あを

二 月



春の水輪

東京 佐藤喜孝

黄落や天に差し出すこどもの手
口開けしままある銕雪の夜
米櫃の底のブリキに暮早し
ひたすらに落羽松ゆる春近し
左右から春の水輪のかさなり消ゆ

冬の朝

東京 東 亜 未

冬の朝鴉と猫とひとの犬
靴片方もうすぐ落葉に埋まりさう
たましひに充電の欲し日向ぼこ
犬の背にあはせてしやがむ日向ぼこ
冬の朝誰かを待つてゐるベンチ

冬 支 度

三 重 長崎桂子

冬構仕事の人の聲たのし
捕はれてなほもがぶつとあばれ熊
時雨るるや定時制生徒さつと過ぐ
水墨画朱色ひとすぢ暮早し
冬満月散るものもなき枝の影

埼 玉 早崎泰江

一羽来て何を啄む寒雀
深々と落葉踏む音過ぎし日々
大根煮る音やさしきや母は亡き
羽音たて尾長飛び立つ朴落葉
真つ青な空に影絵の枯木立
落葉前号正誤して蕞あざやか永平寺

春一句碑・林芙美子館

東京 堀内一郎

八の坂三味も流れて過去の冬
句碑を去る石の冷たさ手にのこし
小間客間暗きに近き冬ともし
しをしをと歩む良子か寒椿
忘れかけた風景に冬惜しみけり

冬の園

東京 森理和

冬うらら婚姻届書く四人
白鷺が四五尾飲みこむ冬夕焼
羽子板市静かに誘ふ店に決め
六人で大羽子板を担ぎ行く
冬の園水音響く方へ行く

ひんがし

東京 吉弘恭子

秋日浴び東雲草の咲きしまま
筑波東北風途中採用初出勤
山茶花や東司の窓の薄日いろ
木枯や無口になりて手の温し
初霜や米穀通帳下げし痕

冬風鈴

埼玉 渡邊友七

逢ひにゆく冬風鈴の鳴りやまず
枯るるもの枯れしめて不二宙にあり
ふるさとへ続く鉄路の錆びて冬
わが触るる草より枯れよ人来ねば
落葉ふむ山路語らず歩みけり

着ぶくれし幼児の通る磨硝子
一人居や揺らめきもせず冬灯
冬至風呂小さき柚子の自在なる
ぬひぐるみ乾してゐる聖夜かな
冬蠅の無重力めく折返し

東京 赤座典子

夫帰る窓拭き終へし冬座敷
十二月愚痴聞き地藏詣でたし
おもたせの栗最中食む冬の雨
木の上の猫が水洩ながながと
日向ぼこぬくぬく膝に猫五キ口

東京 安部里子

五時といふ闇にはじまり隙間風
落葉踏む足音従へ秋遍路
鳥にもよき声のあり星月夜
荘閉ぢし庭の水道滴りゐ
独り身の氣儘や布団ぬくめをり

神奈川

鎌倉喜久恵

ゆきずりにラーメン啜るしぐれかな
日本橋へあと二里半のしぐれかな
みどり兒を膝にあづかり日向ぼこ
千年のいてふ散る千年の石の上
大八洲猪突猛进年賀状

神奈川

木村茂登子

石川 定梶じょう

開戦日屋根やが瓦葺きいそぐ
焼諸の屋台が照らす石畳
蕪漬ける由緒正しき石を置き
門前にいつもぬる犬冬暖か
七味振りすぎたり天皇誕生日

のほほんと切られずに在り裸の木
着膨れた男が女性専用車
葉脈のまだづきづきと落葉かな
手のどこの切れたる血やら年の暮
天保暦からグレゴリオ暦姫子松

東京 篠田純子

極月や騙され笑ふ太郎冠者
夕闇の道に踏み出し石露の花
歳の市あづまをみなも気つぷよく
同じ話おんなじ笑顔日向ぼこ
散り急ぐさざんかの紅手に溢る

東京 芝 尚子

訪ね来て記憶の町は冬構
晩年と云ふべき歩み冬すみれ
銀杏散る黄金の歩道茜雲
東雲や厨にことり寒卵
飢餓画面飽食画面師走かな

東京 芝宮須磨子

数へ日の青空高く風の舞ふ
古日記余白の多き日も楽し
毛糸編む長き夜短く感じつつ
佗助を一輪挿して廁かな
愛犬も家族の一人賀状書く

埼玉 須賀敏子

木の実降る少しポケット綻びて
小春日や干支の置物買ひに出る
いくたびも終のさよなら野菊咲く
低空飛行鴉が狙ふつるし柿
大寺の隅に日の入る冬至かな

東京 鈴木多枝子

愛媛蜜柑

埼玉 竹内弘子

葉のうらに廻る蝗のてあしかな
焼けこげのいろにかも似て蓮枯る
ゆりかもめ若くて気性あらげなる
隅田川ゆビル越えて来しゆりかもめ
留守の間に愛媛みかんの届きけり

冬の窓

東京 田中藤穂

音たてて時の過ぎゆく冬銀河
虹色の鱒に粗塩夕しぐれ
思ひ出のやうに灯の点く冬の窓
わが手足透くかに老の深む冬
煎餅屋は七つ年上町師走

漢訳蕪村

(春の句)

王 岩

閑寂無人造訪日、法師悉心侍紫藤

暮春

荏苒春光老、逡巡遅櫻開

歩々沈思苦、春帰之何処

1 紅日朝霞海上来、映照山桜花盛開

2 紅日昇海上、朝霞照山桜

賞櫻来樹下、得閑花底眠

高野山上櫻花落、皆随玉川水東流

人なき日藤に培ふ法師かな

暮春

ゆく春や逡巡として遅ざくら

歩き歩きものおもふ春のゆくへかな

海手より日は照つけて山ざくら

花に来て花にいねぶるとまかな

玉川に高野の花や流れ去る

人句

轉げおちたのではないと冬の龜

佐藤喜孝

梟の鳴く夜は父の膝に居る

田中藤穂

薪を割る声の一日冬支度

東 亜 未

枯山水千両一本紅をさす

長崎桂子

初霜や告げる尾長のけたたまし

早崎泰江

師走人向ふ側から手を振つて

堀内一郎

留石の奥へ落葉の彩重ね

森山のりこ

猛禽の檻の高きや冬の空

森 理 和

白粥に梅干^{うめ}をおとして大晦日

吉弘恭子

雪の灯やかまくらに似し家に覚む

渡邊友七



1 月 作 品

名にし負ふ上海蟹の卵かな

赤座典子

冬の桐瘤の大小顔に見ゆ

安部里子

海暮るる月を待たずに帰りけり

鎌倉喜久恵

円空仏も木喰仏も冬うらら

木村茂登子

蕎麦を刈る天に大きな影うごき

定梶じょう

飴を切る音の裏間に咳をする

篠田純子

残菊の不揃ひがよし庭の端

芝 尚子

両手あげ友が寄り来る町時雨

芝宮須磨子

鬼柚子をごろんと置けば香のたてり

須賀敏子

短日や然らでも雨の旧街道

竹内弘子

喜孝 抄



八の坂

堀内一郎

枯葉から枯葉へ色をかへてゆく

ゐる筈の狼は居ず冬休

二日はや初目薬と言ふべかり

賀状一枚暮にこの世を去りし人

一月の声真つ直ぐにとどきけり

父の歳越えてひととせ寒卵

人生と言ふ毀れもの年はじまる

林芙美子もんどり打つて冬日射

アトリエは巴里一色寒椿

枯れ枯れて四の坂八の坂見ゆる

特別作品鑑賞 お茶の花 田中藤穂

佐藤喜孝

今年は作品欄を七句から五句に減じた。特別作品を充実せんとする意である。第一弾に準備期間が少ないところ無理に田中藤穂さんをお願いした。『水瓶座』は、東亜未さんの鑑賞文でもご存知のことと思うが、総句数五三二句の中から「馬酔木」・「沖」の林翔先生が四五句も佳句印の入った素晴らしい句集であった。藤穂さんの誕生日は二月十日。余計なことだが私たちの結婚記念日でもある。一九八〇年『暖流』入会されている。句歴に不足はない。

萩伐つて言葉少なき朝ゆふべ

特別作品「お茶の花」は冬の季節で纏めてある。私は俳句をどう表現するかより、何を表現するかに比重をかけたいと思っている。表現法は、何を表現するかによってひとりでに解決するはず。ほんの僅かな意識の違いだが大切なことと思っている。掲句は大きな出来事の句ではない。日常の、心の葉のような内容。自宅の庭でのことでもあろう。花も終った萩を伐った後の数日、庭に出るたびにそこに目がゆきいわれもないさびしさを覚える。在ったものがなくなるといふ空虚感。昼ひなかは何かと気ぜわしく過しているが、朝夕ふとそっくり思いに浸る。「朝ゆふべ」

が心をつくした表現になっている。

広辞苑に出てゐぬ言葉漱石忌

この句も「言葉」にこだわっている。『門』を文庫本で読もうとした。現代仮名遣に変更されていてびっくりした。途中で読むのを止めてしまった。作品への越権行為のような気がした。漱石には造語が多いと聞く。時音とき 裁縫しやう と開巻独特な読みが出て来る。『広辞苑』にも出ていない言葉は数多くあるだろうと推察出来る。藤穂さんは辞書に出ていないので読みにくいと思われるか、またはそのことにおもしろみを感じたのだろうか。生きている言葉はなかなか辞書に納りにくいものらしい。洒落た、そしてちよつと辛口な漱石忌の句になっている。

窓閉める寒夕焼がさびしくて

「て」でふんわりと止めた余情が読後さびしさの尾を引く。そのさびさがどこから来ているのか。想像を超えた美しいものに心的な出会うと一種のさびしいような、しかしさびしいでは括れない心持に陥る。窓を閉めることによりこのような感興に蓋をしようとするのだが、なかなかそうはいかないような気がする。

冒頭でも書いたが、今年は特別作品に力を入れたいと思う。依頼の有無に拘らず寄稿をまっぴる。鑑賞文を吉弘恭子さんをお願いしてある。

あをかき集

堀内一郎 選

初霜
枯葉
終

初霜や鉄門閉ざす大使館 田中藤穂

初霜の道急ぐみな働く人

枯葉掃くことも余生の励みとし

朱印帳墨痕太く枯葉寺

心足る終の棲家よ冬の草

旅の終り冬日の赫き芒原

初霜の庭たあいなく転びけり

初霜を終ぞ見かけぬ町暮し

初霜や化粧水にて顔叩く

終の別れ身ほとりに石菫の花

枯葉踏み見詰める猫も枯葉色

芝 尚子



田中藤穂

「鉄門」で国交等の難しさ厳しさが伝わる。「朱印帳墨痕」で荘厳と一体の空気を見る。寺院落葉期の静寂、作者の心境も透き通る。

あと少し残る枯葉を惜しみつつ
何もかも始めと終り冬三日月
篠田純子

臨終とて弱音は吐かぬ水洩
ホームレスの枯葉を掃けり朝の雨
おいらんの骨つぼ覗く枯葉塚
はつ霜や嫁ぎし子の身思ひやる
初霜やはじめに犬の通りけり
鎌倉喜久恵

橋桁の初霜なでて出勤す
枯葉降る蛇の寢床の上に降る
いつせいに走り出したる枯葉かな
八十やつるべ落しの年の坂
凸凹の地球枯葉のからみつく
吉弘恭子

朴枯葉間あひの垣とほりくる小風
白秋や終のけぶりのゆらめきぬ
枯葉とぶ動物の穴うまりさう
初霜や星降る夜を通り過ぐ

芝 尚子

「たあいなく」の嘲笑も、本音の真剣。
「化粧水」の句、心意気を見せる。「石路」
は季節の変り目を意味し、頷ける。「猫
も」の句は自然との作者の融合姿勢。「惜
しみつつ」の句は自身にも見える。

篠田純子

始終は温容やがて盛衰、生死に、冬三
日月が鋭く象徴している。
「水洩」の負けん気の反面、吾子への
思いは殊のほか温かい。

鎌倉喜久恵

犬を通らせて新鮮な空気を感じる。蛇
は作者の心の温み。「いつせいに」「年の
坂」は限界への挑戦でもある。

吉弘恭子

「からみつく」の句、生への執念と地

初霜や目盛確認温度計

赤座典子

焚かれずに枯葉はいまだ堆し
冬の鴉鳴き交しある日の終り
厚着薄着十一月の終電車
室の花心待ちする最終回
様々な枯葉まざりて吹き溜る
風吹いて右往左往の枯葉たち
日向ぼこ終の棲家の定りぬ
終りなき葛藤持ちて冬に入る
終点のなき山手線冬ぬくし
紅葉してさくら終りも華やげり
いてふもみぢ黄金の衾となり終る
綺麗寂といはれる老で終りたし
終りまで聞かぬか日向ぼこ
旅終る愁ひ立待岬の冬景色
初霜は焚火の跡を濃くふりぬ

安部里子

木村茂登子

定梶じょう

球の大事さを伝えているようだ。殊に小生物への愛情が深く滲んでいる。それが人間愛に。星降る夜にちよつとセンチメンタル。

赤座典子

使い難い「確認」をあえて使う几帳面さが霜を鮮明にした。ものの行方をよく見つけている。色々の人が乗り込む終電車の人間模様。十一月の曖昧さも似合う。

安部里子

右往左往は自身にも通事、「棲み家」の句には安堵感、諦観入り交じる。人生とは「葛藤」の続きであろう。「山手線」は幸せいつまでもの思い。

木村茂登子

桜の紅葉も今年は良かった。伊那市高

初霜の廂のトタン駅舎かな
鼻赤き山師に枯葉しげく降る
掻いて来し枯葉に霜のふりをらん
終バスは降りて見送るみぞれけり
初霜や通園バスは賑やかに

須賀敏子

塩原の外湯に浮ぶ枯葉かな
喜多院の五百羅漢に枯葉飛ぶ
枯葉降るCイーストウッドの後ろ姿
冬なかばパソコン閉じて今日終る
初霜や一步外に出深呼吸
初霜や今朝到着の人迎へ
枝のまま時を見てゐる枯葉かな
終てふはああといふ間の小春かな
高原の小春日終の別れかな
初霜に朝餉の椀をいつくしむ
枯葉散る風追ひ掛ける掛け競べ

長崎桂子

遠では桜紅葉祭が行われた。

「綺麗寂」の句、誰もが願うところ。「聞
くよな聞かぬよな」の句、整理して上述
に。「愁ひ」と「冬景色」は重なる。

定槿じょう

「トタン駅舎」の句、よき時代を伝え
て暖かく、「鼻赤き山師」はユーモアを
見せ、大自然の厳しさ過酷さを思う。

須賀敏子

第一句、子供は風の子の感じで美しい
生命力を。固有名詞使用は平凡だが第三
者の記憶を再現された。イーストウッド
の格好よさに枯葉の渋さを加えて抜群。

東 亜 未

「深呼吸の句」、ここには自然が残って
いる羨ましさ。「枯葉」が時をうかがうは、

枯葉鳴る今宵のラジオここまでに
終点のバス降り枯野風まとも
終の地へ引越す隣人冬はじめ
山茶花の終りなきかに散り敷ける

早崎泰江

終電の音きこえくる長き夜
初霜や回廊をゆく修行僧
公園のベンチに溜る枯葉かな
滑り台枯葉散らして子等すべる
初霜を踏みつつ茶花を選ぶ朝
初霜やタイヤの跡もここで消ゆ
枯葉踏み眼科医のドア開ける
枯菊やここで終りの造成地
石路や終の栖となるもよし
石路や山路は白く孤を描く
生きてたの枯葉溜りに啼く蛙
初霜や仮面のやうに葡萄の葉

森山のりこ

森 理和

人間に何らかの暗示があるように。

長崎桂子

「朝餉の椀」の句、何でもないことだが、
平穩につながる。「ラジオ」の句でけじ
めある生活を見せる。「引越す隣人」の句、
やっと決った安堵と隣人を失う寂しさ。

早崎泰江

「山茶花」の句に生命の強かさを知る。
平凡だが「公園のベンチ」の句に成り行
きに任せる作者の姿勢が覗く。「滑り台」
「すべる」の重複避けたい。

森山のりこ

「タイヤの跡」の句、この先は自在境、
良い環境にある。「眼科医」の句は脱皮
の意図かも知れず。「造成地」にも経済
事情があるらしく、「終の栖」の句、年

栗鼠過る枯葉の音を残しをり
バランスの右へ左へ枯葉散る
己が聴く小さき音ぞ初霜も

渡邊友七

皿洗ふ妻の日々たり外は初霜
初霜や影の中なる去来墓
終戦の瓦礫の中にちちる鳴く
病む妻の寝髪梳く灯よ枯葉落つ
初霜や小石に影の一つづつ
東京の枯葉をまとひ大猩猩
終からはじまる宇宙齏打つ
初霜や一年生の健気なる
木のままの枯葉を花とめづる日日
猪口ほどに垣のあさがほ咲き終へし
初霜の生涯にして解けもせず
右ひだり罪を拭ひし枯葉かな
はじめよき終り拙きかいつぶり

堀内一郎

佐藤喜孝

竹内弘子

輪による頷きも快い感じ。

森 理和

二句目、こんなことがあるのかと驚く。
生命の勞しさが自身に跳ね返る。「バ
ランス」の句、やはり枯葉は生きていた。
政界諸先生のバランスの悪さ加減、未だ
に納らず。

渡邊友七

「小さき音」の句、自然の中に生かさ
れている。「去来墓」の句、あの大物に
して、まこと小さき墓。影の中なる
に人物像が隠れている。終戦のちちるは
生涯消えぬ。

「皿洗ふ妻」「病む妻」の句にただなら
ぬ夫婦の厚みを見た。

あを キー・ワード俳句小辞典

① あを編集部 編

| 黄 | 広 |
|--|---|
| <p>落葉の上さらに黄色のグラデーション 雪ふれり黄泉への道をとざすかに 春待つや卵を割れば黄身ふたつ 赤黄の絵具の滲む冬の雁 歓談のあとの眠たさ黄夕焼 黄色なる堅香子の花今朝の夢 立春や第九ソプラノ黄のドレス 美しと黄泉をおもへり白木蓮 黄み帯びてあまくなりゆく干大根 黄砂とも再開発の塵かとも むらさきと黄いろの野原つばくらめ 天地玄黄宇宙洪荒初声裡 梅雨冷や青赤黄色江戸の地図 ひしひしと菊の黄母の忌日なり</p> | <p>春の鴨末広がりの波を立て 枯葉落つ廣目天の年埃 畳屋の仕事場広し金魚玉 広広のゴリラの背中春の風 冬海煮干工場の跡広し 枯れ菊の庭に切干広げたり 小さき部屋広くなりけり春の風 探偵の折り込み広告春炬燵 広告を丹念に見る秋の雨 後頭に西日あまねし広島忌 窓広き洋館建ちぬ村の秋 高原に空の広さの虹かかる 東京都庁壊れぬものか広島忌 春日和歩幅を広くゆつくりと</p> |
| <p>篠田 純子 芝宮須磨子 芝 尚子 松村美智子 松本 米子 須賀 敏子 須賀 敏子 早崎 泰江 竹内 弘子 竹内 弘子 長崎 桂子 定梶じょう 田中 藤穂 渡邊 友七</p> | <p>安部 里子 吉弘 恭子 芝宮須磨子 松村美智子 森 理和 須賀 敏子 斉藤 裕子 赤座 典子 早崎 泰江 竹内 弘子 定梶じょう 東 亜 未 堀内 一郎 鈴木多枝子</p> |

羽 根木公園へ行った日は冷たい雨がしとしとと小止み
なく降っていた。探梅で訪れたのは一昨年であつた

るか。梅は雨中にも凜として咲いていたが、その梅より
も雨の寒さの方が印象に残っている。雨は体の芯まで氷ら
せたように昼食にとラーメン屋に入ったが箸を握りしめて
棒のように使つしか手が利かなかつた。枯林には鳥が身動
ぎもせず点々と止っていた。その時の写真を今月の表紙に。

あ をの恒常的な遅れを正そうとしている途次である。

今号は前月評が休載になっている。次号で二月分掲
載する予定、正常化まで今しばらくで寛恕をお願いします。
この機会に作品欄の活字をすこし大きくした。ほかのペー
ジも許される範囲で大きくしようと考えている。

最 初の記憶の編集を「あを」の合間を縫って進めてい
る。「あを」には大切な一本になると思う。編集し
ながら出来上つた本を想像してちよつとハイになる。時間
をもつととれたらと思う。しかし充実した限られた時間
である。

扉 ページの篆刻は「あを」で一度ご紹介したことがあ
る。その折りで紹介しきれなかつた篆刻作品をご紹
介している。篆刻は書の一分野であるが方寸の限られた世

界に漢字が押込められているのではなく、のびのびと表現
されている世界に惹かれる。

俳 句朝日が休刊との知らせがあつた。ユニークな企画
大判でカラーページの多い総合誌であつた。いや、
「ある。」である。六月号まで刊行されるので、貧者の一灯
ではあるが応援したい。
(喜孝)

ご芳志多謝

大山 夏子 様

二〇〇七年二月号

二月三日

発行所 東京都中野区中央2-50-3
電話 090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝 竹僊房

カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130-6-55526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。